

【科研費応募支援ニュースレターNo.29】 発信日 241105
タイトル_案 1_科研費応募支援ニュースレターNo.29_研究評価

教育職員各位

URA 高木敦子

いつもお世話になり、感謝申し上げます。URAの高木敦子です。
9月18日に、令和7年度科研費（基盤研究等）の公募期間が終了しました。ご多忙な中、申請いただきました先生方に、ここから感謝申し上げます。
また、申請には至らずとも、申請しようとお努力された先生方もいらっしゃるのではないかと思います。

特に後者の先生におかれましては、お困りごと等ありましたら、なにかURAにでもできることがあればと思っております。個別にメールをいただきましたら、面談の日程等調整のご連絡をさせていただきます。是非ともご検討をよろしくお願い申し上げます。

今回のニュースレターでは、今までに取り上げていませんでした「研究評価」について書いてみました。何のテーマについて書くかを悩みながら、いくつかの雑誌を見ていた時に、『実験医学』2024年10月号に大阪大学の標葉隆馬（しいばりゅうま）先生が書かれた「インパクトファクターを超えて：DORAをはじめとする研究評価の動向とその論点」がありました。URAをしているのに、恥ずかしながら「DORA」を知りませんでした。今回、これを勉強しつつ、研究評価の現状について調べてみました。

「DORA」（The Declaration on Research Assessment、研究評価に関するサンフランシスコ宣言）（資料1）は2012年の米国細胞生物学会年次会議での会合を発端とする宣言で、ジャーナル・インパクト・ファクター(IF)の限界を指摘し、科学者を評価する際に代替指標として用いないこと等を勧告し、18の提言がなされています。2023年12月14日の時点で、署名数は164国、3,064機関、21,262個人だそうです。日本においては、大学として最初に東京大学が署名したのが、2023年12月1日で、日本の研究機関全部でも17機関ですが、徐々に増加していているとのこと。なお、東京大学はDORA署名後、どのように各教職員の研究評価が変わったかは、確認できませんでした。

研究評価に関して、DORA以外に有名なものは、「研究計量に関するライデン声明」があります（資料2）。日本語解説（資料3）もありますので、ご参考まで。

雑誌Aの2018年のIFは、ご存じの通り、【「2017年と2016年に雑誌Aに掲載された論文」が「2018年に」引用された回数】÷【「2017年と2016年に雑誌Aに掲載された論文」の数】で示されます。IFは個々の論文の評価ではなく、その学術誌の評価となりますので、これを用いて、研究者の研究評価に使用することは、以前から問題にはなっていました。また、雑誌内の論文の引用の分布は非常に偏っていること、分野がちがうと研究者数の違いから、雑誌の比較にも使えないこと、原著論文より総説

の方が引用される回数が多くなる傾向があることなどの問題点が指摘されてきました。しかし、研究を評価するというのは大変難しい仕事であり、数値として表されていると使いやすいなどの理由で、研究者個人の研究評価に頻繁に使用されています。実際、私の以前勤務していたところでも、毎年（年度ではなく1月から12月の間の論文が対象。年度にすると、出版年が4月から12月の年と1月から3月の年の2種類はいつてくるので紛らわしいためかと思います）、研究業績リストとIFの合計を提出することになっていました。それによって、ボーナスにも影響するとのことでしたが、どのように影響したのかは報告されていませんでしたので、与えられたものをありがたうにいただいただけではあります。今もまだ、この制度が続いているのかはわかりません。

IF以外にも定量的評価のできる指標としては、h-indexなどがあります。これは「被引用回数がh回以上である論文がh本以上あることを満たす最大の数値h」のことです。これを用いることで、ある著者の論文出版数と被引用数（論文の質とみなされている）を同時に扱うことができますが、これにも欠点があります。10回引用された論文を10本もつ研究者と、100回引用された論文を10本もつ研究者を区別できない、研究歴の短い若手の研究者が不利になるなどの点です。

その他、多種類の指標があり、それらの比較もなされています（資料4）ので、必要に応じてご参照ください。

文系・社会学系の分野では、更に研究評価がむずかしいことは、ご存じのとおりです。研究成果の形の多様性（査読付き原著論文のみでなく、展示、発掘調査などもある）、出版経路の多様性（とくに単著の著書が最重要とされる分野もある）、言語の多様性、時間的サイクルの多様性（IFのように2～3年の期間ではとらえきれない、長期引用され続ける文献もある）などといったことが、挙げられています。

研究評価に関して、最近では「責任ある研究評価(responsible research assessment: RRA)」ということも言われています。RRAは「多様で包摂的な研究文化のもとで、複数の異なる特性を有する質の高い研究を促し、把握し、報奨するような評価のアプローチを指す包括的用語」のことです。

不適切な研究評価により、IFが高い雑誌の出版社は強い権限を持ち、高い購読料やオープンアクセス費用を請求したり、論文の付加価値を上げるために査読過程において多くの追加実験を要求し、それにより、研究者が疲弊していくような評価ではなく、評価により、皆が幸福になり、研究の活性化が進むようなものが望まれ、世界中でその努力が続けられています。

以上です。

本学 web サイト【研究・社会連携】科学研究費助成事業】ページ内に、科研費の応募支援や研究支援に関する情報が掲載されています。

https://www.osaka-sandai.ac.jp/research/grantinaid_scientific_research.html

【ID: kenkyu パスワード : sanken3001】

これからも、科研費申請や研究に関し、情報共有のためメール発信させていただき、なにか少しでも先生方のお役に立てればと願っております。ご不明点、ご意見、ご希望などございましたら、メールで URA 高木敦子 (8atakagi@cnt.osaka-sandai.ac.jp) まで、お伝えください。

失礼いたします。

資料 1 研究評価に関するサンフランシスコ宣言の全文 (日本語)

<https://sfdora.org/read/read-the-declaration-japanese/>

資料 2 研究計量に関するライデン声明

Hicks D, et al: Nature 520:429-431, doi:10.1038/520429a (2015)

資料 3 研究計量に関するライデン声明に関する日本語解説

小野寺夏生, 伊神正貫 : STI Horizon 2:35-39, doi:10.15108/stih.00050 (2016)

資料 4 研究評価指標に関する考察 清水勝太、高間康史

人工知能学会第二種研究会資料

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsaisigtwo/2018/AM-20/2018_05/_pdf/-char/ja